

私の處女作——と言えば先ず『猫』だろうが、別に追懷する程のことでもないようだ。ただ偶然ああいうものが出来たので、私はそういう時機に達して居たというまでである。

というのが、もともと私には何をしなければならぬということがなかった。勿論生きて居るから何かしなければならぬ。する以上は、自己の存在を確実にし、此処に個人があるということ了他にも知らせねばならぬ位の了見は、常人と同じ様に持っていたかも知れぬ。けれども創作の方面で自己を発揮しようとは、創作をやる前迄も別段考えていなかった。

(中略)

茲で一寸話が大戻りをするが、私も十五六歳の頃は、漢書や小説などを読んで文学というもの面白く感じ、自分もやって見ようという気がしたので、それを亡くなった兄に話して見ると、兄は文学は職業にやならない、アツコンプリッシメントに過ぎないものだと言って、寧ろ私を叱った。然しよく考えて見るに、自分は何か趣味を持った職業に従事して見たい。それと同時にその仕事が何か世間に必要なものでなければならぬ。何故というのに、困ったことには自分はどうも変物である。当時変物の意義はよく知らなかった。然し変物を以て自ら任じていたと見えて、迎も一々此方から世の中に度を合せて行くことは出来ない。何か己を曲げずして趣味を持った、世の中に欠くべからざる仕事がありそうなのだ。——と、その時分私の眼に映ったのは、今も駿河台に病院を持つて居る佐々木博士の養父だとかいう、佐々木東洋という人だ。あの人は誰もよく知って居る変人だが、世間にはあの人を必要として居る。而もあの方は己を曲ぐることなくして立派にやって行く。それから井上達也という眼科の医者が矢張駿河台に居たが、その人も丁度東洋さんのような変人で、而も世間から必要とせられて居た。そこで私は自分もどうかあんな風にえらくなつてやつて行きたいものと思ったのである。ところが私は医者嫌いだ。どうか医者でなくて何か好い仕事がありそうなものと考えて日を送つて居るうちに、ふと建築のことに思い当った。(以下略)